



《 頭皮の内部二.三ミリに男性は人生のすべてをかけている／二〇〇八年に秋葉原無差別殺傷／マーティンスコッセン『タクシードライバー』／絶対触れてくれるなよ、殺すぞ！という暗黒狂気／メディアに出るのではなくメディアそのものになる神聖かまってちゃん 》

神聖かまってちゃんと秋葉原無差別連続殺傷事件

——確認されない死のなかで

「いわば、一個にすぎない一人の名前が、一人の人間にとってそれほど決定的な意味を持つのはなぜか。それは、まさしくそれが、一個のまぎれがたい符号だからであり、それが単なる番号におけるような連続性をはっきりと、拒んでいるからにほかならない。ここでは、疎外というのはむしろ救いであり、しゅんべつされることは祝福である。」石原吉郎

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

2019年の感想を述べて頂いた方の中から「神聖かまってちゃん」さんと軸になりました。

今回は、「石原吉郎（詩人）」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんと秋葉原無差別連続殺傷事件

———確認されない死のなかで

近畿大学は二〇一四年の二月、ブロッコリースプラウトに一.四倍の育毛効果があることを発表した。

ブロッコリースプラウトのエキスに、毛髪の成長シグナルを調節する毛乳頭細胞の分裂を促進し、遺伝子を活性化するという効果があることを実験で確認したと発表した。

毛髪の成長に必要な骨形成タンパクの遺伝子発現が約一.四倍に上昇していることが確認されたという。

↓

うおお！



これは世の男性に朗報である。

男性の心配ごととは、将来自分がハゲるかハゲないかだ。

六〇歳になってハゲるなら結構。しかし、三十歳や四〇歳代にハゲたら、たとえ自分が大金持ちになってようが、名声を手に入れようが、意味がないのだ。男のアイデンティティは、肉体でも知性でも富でも名声でもなく、頭の毛だからだ。頭皮の内部二.三ミリに男性は人生のすべてをかけている。

男性がこころにひっそりと抱えている頭皮の悩みこそ、本当の孤独なのだ。

『みじかくも美しく燃え』という映画がある。↓

『みじかくも美しく燃え』という映画がある。

詩人の石原吉郎はそのラストシーンに不思議な感動を覚えたという。

映画は、心中を決意した男女が、死に場所を急ぐ場面で終わるが、最後に道ばたで出会った見知らぬ男に、男が名前をたずね、そして自分の名を告げて去る。



石原吉郎が考えたのは、死にさいして、↓

石原吉郎が考えたのは、死にさいして、その死の瞬間まで自分が存在したことを、誰かに確認させたいという希求であり、同時にそれは、自分が結局は自分として死んだということを確認させたいという衝動ではないかということであった。そして、その確認の手段として、最後に自分に残されたものは、自分の名前だけだという事実は、背筋が寒くなるような承認である、といった。

さらにこう続ける。↓

さらにこう続ける。にもかかわらず、それが自分に残されたただ一つの証であると知ったとき、人は祈るような思いで、おのれの名におのれの存在のすべてを賭けるだろう。



例えば、映画「タクシードライバー」では↓

例えば、二〇〇八年に秋葉原に二トントラックで特攻、刃渡り一三センチ・全長二三センチのダガーナイフで無差別殺人をおこなった加藤智大が、匿名掲示板に己の犯行を実況するようなかたちで書き込んできたのがそれである。

そして、無差別殺人もそれだろう。無名の自分が死ぬならば、いったい自分は何をこの世に残せたのだろうと考える。その自意識の行き着くルートのひとつが人を殺すことになるのだろう。

ミュージシャンは↓

例えば、マーティンスコッセスのヒット作の『タクシードライバー』。

ベトナム戦争から帰還したトラヴィス（ロバート・デ・ニーロ）は女性に惚れるがアプローチの仕方を見事に失敗、それからはボンクラの自意識が見事開化し、町にはびこる悪はおれが肅清するぜと意識を高め、拳銃を胸に隠し持って外をパトロールする。トラヴィスは何者にもなれない自分自身に絶望し、おれがうまくいかないのは世の中がおかしいからだと考えたのだ。

ボンクラあるあるすぎて泣きそうだ。



加藤もトラヴィスも何者にもなれない自分に嫌気がさして↓

加藤もトラヴィスも何者にもなれない自分に嫌気がさして、自分の全存在をかけて何者かになろうとしていたのだろう。大体のロックミュージシャンもそういう心裡だ。ミュージシャンがいえばカッコいいが、そうじゃなければさむい。

なぜ人は自分の存在を誰かに知らせようとするのか？なぜひとりで誰にも知られることなく死ねないのか？

石原吉郎はこう語る。↓

「いわば、一個にすぎない一人の名前が、一人の人間にとってそれほど決定的な意味を持つのはなぜか。それは、まさしくそれが、一個のまぎれがたい符号だからであり、それが単なる番号におけるような連続性をはっきりと、拒んでいるからにほかならない。ここでは、疎外というのはむしろ救いであり、しゅんべつされることは祝福である。」

むずかしいが、伝えたいことは何となく分かる。人間がその連続性を拒むのは自身が生きて意思をもっている証拠ということだ。だから、自分の存在を誰かに知らしめたいという欲求は人間として普通なのだ。

ンキー成分が↓

容姿とルックスの面でロックミュージシャンからヤンキー成分が近頃は失われているように感じるが、本当のところはどうなのだろう。いまはパソコン一個あれば、いや、スマートフォン一個あればネットワークを使って自身を表現できる。現代はネットを使った表現の方法は数多くあり、表現欲は多角的に拡散して発散される。

同時にSNS疲れというものも発生している。岡田斗司夫の提唱する「評価経済」の読みでは、ネットによる情報過多の果ては、自分が世間でどう見られるか一切どうでもよくなって、狭い地元（コミュニティ）を最優先する中世の田舎者的になるといっている。それをさらに「ヤンキー」的といっていた。

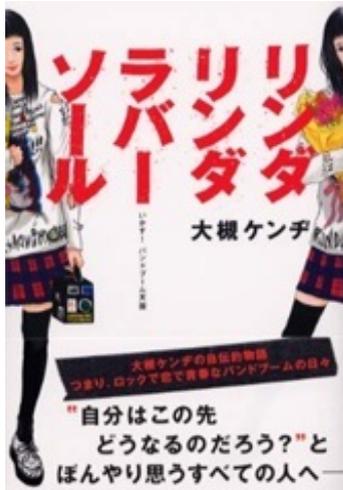
たしかに、「今・ここの感情」が最優先になっているような空気がロックシーンにある。

ボカロが好きだろうが、↓

「今・ここの感情」が最優先になっているような空気がロックシーンにある。ボカロが好きだろうが、西野カナが好きだろうが、嵐が好きだろうが、アイドルグループが好きだろうが、「ああ、きみはそうなんだね、ふむふむ。いいんじゃない」という態度をとることがロックリスナー的には正義というふうになっている気がするのだ。若い読者はこの違和感分かるだろうか（いや、わたしは二十代前半であるが）。

ロックリスナーならば自意識の塊であろうから、↓

ロックリスナーならば自意識の塊であろうから、気に入らないジャンルを志向している人間を見つけると、本来ならば、血で血を洗うような音楽闘争が起こるはずなのだ。ボカロ？死ね！アイドル？死ね！西野カナ？死ね！AKB48？死ね！となるはずである。



お前もわたしのものを批判するんじゃねえ↓

いや、きっとそう思っているのだ若い諸君も！（ごめんなさい。決めつけてみます）。しかし、表に出すときはさも肯定してるようなふうを装う。わたしは思うのだ。「ああ、きみはそうなんだね、ふむふむ、いいんじゃない。・・・（おれは嫌いだが！）」となっちはいないかい？

自分のコミュニティが最高なんだから相手のことは批判しない、でもお前もわたしのものを批判するんじゃないやねえ、というような暗黙の了解がロックシーンにあるように思うのだ。ロックシーンだけでなく、音楽シーン全体にその空気があるように思う。それが出来たのは、一〇年代以降だろう。

文化系特有の相手を尊重するやり方がいつの間にか、わたしが相手に触れない代わりにわたしにも絶対触れてくれるなよ、殺すぞ！という暗黒狂気のヤンキーに変わってしまったのだ。むむむ。

闘争心は消えてないのに闘争を行わなくなったいまの時代↓

闘争心は消えてないのに闘争を行わなくなったいまの時代に「
そんなんじゃねえだろ」とぶちまけることが必要だった。

それがロックンロールのいまある役割のはず。現れたのは神聖
かまってちゃんだった。



彼らは激薬だった。↓

彼らは激薬だった。

「夕方のピアノ」では《死ね！》という言葉を連呼する。それは当時だれも歌詞に載せることが出来ない言葉だった。さらに、自身がおこなうネット配信では他のバンドの名前を挙げて面白おかしくやゆしてみる。

そもそも、なぜお互いの音楽の好みに触れないでいれるかという、その音楽性と活動の話題が分かれているからである。神聖かまってちゃんはわざとそこに噛み付いてみるのだ。そうすると、そのファンは怒りの反応をみせる。本性をあらわすのだ。しかし、それが音楽好きの姿であるし、人間の姿だろう。人間はそんなに利口じゃないのだ。

神聖かまってちゃんとクロスオーバーしていく。彼らの名前は膨らんでいくのだ。

もとをたれば、他のグループを批難してはいけないという決まりはない。一昔前のロックンロールオンジャパンではミュージシャンはけっこう好き勝手いっていた。

例えば、ミッシェルガンエレファントがヴィジュアル系をディスった次のページがヴィジュアル系バンドだったこともあったし、YUKIは福山雅治にたいして桜坂をひきあいディス。神聖かまってちゃんが特別なことをしているわけではない。

地上波から音楽番組が消え去ってから↓

地上波から音楽番組が消え去ってから数年、ミュージックステーションもアイドルの巣窟になっている。クロスオーバーが面白さだったのにもうそれが望めなくなった。

そんな世の中でどう上がっていくか。攻めるしかない。だから神聖かまってちゃんは攻める。他の音楽グループと自分たちを血を吹き出す覚悟で自らクロスオーバーさせていく彼ら。

全存在をかけてこの世に↓

彼らは全存在をかけてこの世に名前を残そうとしている。石原吉郎のいう、彼らは一個のまぎれがたい符号であり、それが単なる番号になるような連続性を拒んでいるからだ。人間だからだ。

自分が死ぬと分かると、自分が何のために生きているかを人は考える。

どうせ死ぬのに生まれた。なにもしないで死ぬ。なのに生まれた。どうせ死ぬのに生まれた。生まれた意義ってなんだ。

――戦うためだろう。戦うために生まれてきた。どうせ死ぬのだから。

わたしも単なる番号の連続性になりたくない。そこから拒まれたい。でもどうすればいいか分からない。

しかし、頭皮の毛根からは拒まれたくないので、ブロッコリースプラウトをこれからスーパーで買ってこようと思う。←

うおお

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89011>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ